

隠喩に関する一考察

岩倉 孝明

要 旨

隠喩は、われわれの言語と認識のありかたに深くかかわる言語現象として、多くの人々の関心を集めてきた。本稿の目的は、隠喩のもつ開放性と創造性を、隠喩のはたらく仕組みから説明するための見取り図を描くことである。隠喩のはたらく仕組みについては、諸説が並立しているが、本稿は、それらを吟味しながら、隠喩が、話者の意図する意味を伝達するだけでなく、一つのイメージを喚起することによって、聞き手がその隠喩を、ある程度自由に解釈する余地を残していることに注目し、この点に、隠喩の開かれた性質と、創造的な働きの根源を求める。

キーワード：隠喩

はじめに

ふつうは言語表現「A」によって表わされている物事を、それとは違った表現「B」によって表すということが、人間の言語においては可能である。しかし、この隠喩という現象は、われわれの言語や認識にとってどんな意味をもっているのか。これは隠喩をめぐる根本の問題であるといえよう。そして、哲学だけでなく、言語学や心理学などの分野における、隠喩をめぐる近年の研究の多くが、隠喩がわれわれの言語と認識に深く係わっていることを認めてきた。すなわち、隠喩は、単なることばの装飾ではなく、われわれが世界をみるその見方を変えることができるような言語的工夫なのである。

しかし、隠喩の本質の問題は、隠喩のはたらく仕組みを説明するという課題から、切りはなすことができない。むしろ、後者は前者の前提である。上述のような、隠喩の発見的ないし創造的性格は、本来の表現以外の表現をもって物事を指すという、隠喩の定義そのものによって、すでに暗示されていると言える。けれども正確に言って、これはどんな仕組みによって可能となるのか。この問いに答えなくてはならない。

本稿では、隠喩の創造的性格を、隠喩においては、隠喩表現の働きの二重性という点から説明できないか試みたい。この二重の働きとは、第一に、隠喩表現の意味の働きであって、話者は、隠喩表現の意味の一部分に焦点を当てることによって、比喩される

ものの新たな見方を聞き手に提案することができる。第二は、隠喩表現がもつ、イメージを指示する働きであって、聞き手にその表現に対応する事物の像を想起させる。否、それにとどまらず、さらに今度は、聞き手が、そのイメージの一部分に自由に注目することによって、世界を見る見方の発見に、自ら参加できるようになる。つまり隠喩は、言葉の意味という枠を超えて対象の新たなイメージに直面させることを通じて、人に、世界をみる視角を自ら主体的に切り開いてゆくための助けを提供することができるのである。

本稿は、このような見通しに立ちながら、次のような順序で考察を進めてゆくことにしたい。まず、第I章では、人間の言語活動一般に、意味の焦点化と後景化という現象が広く見られるということを確認する。これは、われわれの通常の言語使用において、すでに、物事の見方のうちに、見るものの主体性が浸透し始めているということである。第II章では、隠喩との関係がつねに問題とされる直喩の構造を考察する。直喩では、直喩表現の意味のうち、話者の強調したい一部分が、一貫して、その直喩の意味の中心点であることを示したい。第III章では、隠喩の仕組みと本質をめぐる理論の代表的なものを概観し、その意義と問題点を検討する。第IV章では、直喩と対照しながら、隠喩表現によるイメージの喚起の問題を軸に、隠喩の独自性を明らかにできるよう努めたい。

I 意味素性の焦点化

われわれが言語を使う際に一般に見られる、以下のような現象について考察してみよう。

一つの表現に対応する意味は、いろいろな意味の要素（以下「意味素性」¹⁾と呼ぶ）の統合体と考えることができる。請われれば、われわれは、一つの語句に應ずる意味素性を、思いつくままに列挙することもできる。もちろんこれは、われわれがそれらの意味素性をつねに完璧に記述できるということを含意しないけれど、一つの言語表現の意味を、こうして基本的意味から、副次的意味へと広がる意味の要素の統合体であると見做すことは、言葉についてのわれわれの日常的な理解からみても、自然なことであろう。

しかし、言葉の意味に、このような「客観的」な秩序をみとめることは、言語表現を、具体的な使用から切り離して、それ自体としてみた場合に可能なことである。それらの語句を実際に使用するときには、上記の意味での「基本的意味」と「副次的意味」との関係はいったん取り崩され、話者（書き手）は、任意の自ら選択した意味素性に焦点²⁾を当てて、その表現を発話する。また聞き手（読み手）も、その焦点を推測できなければ、話者の言わんとするところを正しく理解できない。たとえば、「この指輪は金メッキだ」は、宝石商が言う場合、工業技術者が言う場合、そしてまた殺人事件を担当する捜査官が言う場合とで、焦点が異なりうるであろう。一人の人でも、それぞれの発話場面ごとに、微妙なニュアンスの違いがあることはもちろんである³⁾。もし話者の焦点をつかみ損ねれば、聞き手は、「それはどういう意味ですか」と尋ねるはずである。「金メッキ」に含まれる意味素性を羅列することなら容易だが、その発話で、どれが焦点化されているか（〈安価である〉といたいのか、〈腐食しにくい〉といたいのか等々）がつかめなければ、発話の意味は理解できないのである。

このような特定の意味素性の焦点化は、一方で、逆に焦点化されない意味素性が話者の意識の後景へと退くという現象を伴う。たとえば、「金メッキ」の焦点が、〈安価である〉ということにあったとすれば、〈傷つきやすい〉〈腐食しにくい〉といった「金メッキ」のその他の意味素性は、話者の注意ないし伝達的関心の中心から遠ざけられる。

このような現象がわれわれの言語の使用において、広く見られることは、だれでも承認するはずである。そして、われわれの見るところでは、この働きがあればこそ、直喩や隠喩の働きもまた、可能となるのである。

しかしこれについては、次の事柄を確認しておくことが重要であろう。それは、われわれが言葉をふつうの仕方で、つまり「文字通りに」(literally)使用しているような場合には、焦点化の権利は原則として話者だけにあるということである。話者こそ、焦点から後景へと広がる意味の秩序の支配者なのだ。そして少なくとも、話者の意図を理解することが、当の発話の意味を理解することであるような日常の談話では、聞き手はたんに受動的な観客の役割をもつにすぎないのである。

しかしこれは、通常の（表現の文字通りの意味での）発話の場合である。直喩や隠喩については状況はどう異なるであろうか。次章では、まず直喩の場合について考えてみることにしよう。

II 直喩の構造

第I章で念頭においていたような、ふつうの、文字通りの発話では、われわれは、自分が特定の意味素性に焦点をあてていることを、自覚することは少ない。話し手と聞き手との間に、言葉の意味の理解をめぐる誤解が起きたような場合などを除くと、それが目立つようなことはあまりない。それは、ふつうの発話では、聞き手が、話者の発した表現の意味素性のうちのどれを焦点化しても、誤解にはなるが、間違いにはならないからである。目の前にある指輪が金メッキであり、話者の焦点が〈安価である〉にあったとする。しかし、ここで人が「この指輪は金メッキだ」という発話を聞いて、「金メッキ」の焦点を、〈腐食しない〉であると考えたとしても、話者の意図の誤解にはなるが、誤った判断をしたことにはならない。指輪は実際に錆びないだろう。

この点においてはっきりと異なるのが直喩なのである。そのことを明らかにするために、「SはPのようだ」という簡単な直喩形式について、考えてゆこう。直喩という現象について、直感的に誰でも次の二つのことを認めるであろう。（「禍福はあざなえる縄のごとし」という格言を直喩の例にとろう。）

第一に、直喩においては比喩されるものを表示する語句（被喩詞 (tenor) ⁴⁾。この場合「禍福」）と比

喩するものを表示する語句（喩詞（vehicle）⁴⁾）。ここでは「あざなえる縄」の間に、ある種の緊張ないし驚きを感じられるということである。

それにもかかわらず第二に、直喩は、真であり得る（つまりその直喩が的を得たものなら）ということである。これは、直喩を、「SはPである」という文字通りの言明と比べてみると明らかである。「SがPである」が偽である場合でも、「SはPのようである」が真であることは、十分可能である。

これらは、「緊張」と「理解の可能性」と並べてみてもよいであろう。緊張だけでは、ただ不可解な言明であるにすぎない。理解できるというだけなら平凡である。理解と緊張の弁証法こそ、直喩の効果の実体である。しかし、直喩言明のこの二つの、互いに矛盾するようにみえる性格は、どのようにしたら、両立させることができるだろうか。

こう説明できると思う。われわれは、喩詞を、二つの異なるレベルにおいて同時に眺めているのである。第一に、喩詞は、その表現全体として理解される。今の例では、「あざなえる縄」をそのまま丸ごと理解しようとする。しかし、喩詞の意味素性には、被喩詞に不適合なもの、たとえば「物を縛るのに使用する」などが含まれている。そこで聞き手の心に、「あざなえる縄」という喩詞が被喩詞「禍福」の意味に対立しているという印象が引き起こされる。しかしわれわれは又、喩詞の意味素性のうち、話者の注意の焦点となっているもの、たとえば「二つのものが交互に現れる」を推測することによって、当の直喩の理解に達することができる。

緊張と理解の両立は、このように喩詞全体の意味と、焦点化された意味素性との、あるいは文の意味と話者の注視点との二重写しを通じて、可能になっていると考えられる。

けれども、喩詞の全体としての意味と、話者が焦点化する意味素性の、直喩における重要度は、同じではないであろう。話者の焦点が直喩では優先するのだ。「SはPのようである」という直喩は、すでに文字通りの意味において、Sがある特徴fについてPと等しいことを主張する一方で、Pが全体としてはSに適合しないことを認めている。そのことを示すのが、「ようである」「似ている」という直喩の典型的な標識である。Sはある特徴についてPに一致するだけだということを、それは明示している。

もちろん、直喩文そのものからは、特徴fが何であ

るかは分らない。それは文脈から了解されなければならない。しかし、このfこそ、直喩のかなめであることに変わりはない。たしかに直喩でも、喩詞の全体的意味は背景として存在しており、これに対応する対象の像も聞き手によって思い浮かべられよう（たとえばあざなえる縄の）。しかし、fという中心点を失い得ないという点が、本来、直喩の特徴なのである。

III 隠喩をめぐる諸説

ある人が、「H氏はライオンだ」という文を適当な文脈において、隠喩として発話したとする。話者は、H氏が剽悍なる人物であるといいたいのだとしよう。その場合、「ライオン」の発話における焦点化された意味素性は「剽悍」である。では、焦点化されずに後景へ退いていて、しかも常識的には「H氏」に適合しないように思える意味素性（くたてがみを持つ）などは、この隠喩においてどう処遇されているだろうか。つまり、焦点化されない意味素性を排除しない、「ライオン」の意味全体が、H氏に帰せられていると言えるであろうか。

「H氏はライオンのものであった」という直喩ならば、前章で確認した通り、「ライオン」の全体ではなく、その一部の意味素性だけが、H氏に帰せられていることになるであろう。この同じ問題を、今度は隠喩について考えてみたい。本章では、まず手始めに、この問題について、主要な隠喩理論の基本的立場からどう答えられるのかについて、簡略ながら検討しておくことにしよう。

1. 「隠喩的意味」の否定説

H氏が、単に剽悍であることだけでなく、ライオンそのものであることを上の隠喩は意味している、とする立場の代表者であるD. デイヴィッドソンは、端的にこういつている。

「隠喩は、単語がその最も文字通りの解釈において意味することを意味し、それ以上のことは何も意味しない。⁵⁾」

「もっとも単純な隠喩の場合でさえ、その内容が何であると考えられているかを正確に決定するのはこのように困難である…。このように困難である理由は、私の思うに、実際にわれわれが終始注意しているものは、隠喩がわれわれに気づくよう強いるものであるのに、捉えられるべきもの〔＝隠喩的意味（筆者補足）〕が何かあると、われわれが想像していること

なのだ。⁶⁾」

デイヴィッドソンの説を整理するとこうだろうか。隠喩の意味は、その「文字通り」の命題内容以外にはない。そもそも隠喩的意味などというものは存在しない。隠喩に人が期待するような効果は、もっぱら表現の「使用」(use) に属する⁷⁾。しかしまた、この効果ないし力を、隠喩文の意味から理解するための一般的な規則は存在しない。

もしこの見解にしたがえば、われわれが「H氏はライオンだ」に感じる「H氏」と「ライオン」の間の緊張を説明するいかなる論理も存在しないことになる。それはむしろ、心理学の問題になるように思える。

この説で、隠喩文が文そのものとしては文字通りのことしか意味しないという論点は、尊重すべきであろう。隠喩について議論のポイントは、隠喩が言語表現上、「SはPのようだ」という直喩の形式があるにもかかわらず、「SはPである」という言い切りの形をあえて用いる理由は何か、ということの説明にある。隠喩文を、あらゆる文脈的、あるいは言語行為的側面を除外して見るなら、この点についてのデイヴィッドソンの考え方は受け入れてよいように思われる。

ただし次のような疑問は残る。デイヴィッドソンは、隠喩文が聞き手を揺さぶる効果について語るが、その効果はまったく心理学だけの問題だろうか。なるほど、この種の効果を、文の意味や発話の形式的な構造だけから予測することの困難は、明らかである。後ほどまた触れるが、隠喩を直喩に置き換えても、聞き手に与える心理的效果にさほど差が見られないように思われるようなケースは、現実には少なくないであろう。

ここで、次のようなカント的区別をたてるのが有益に思える。つまり隠喩の問題をめぐるのは、その聞き手におよぼす力の実際に関する「事実問題」と、どんな効果が、隠喩と呼ばれている言語的（意味論的、語用論的）仕組みから期待されるか、否、むしろわれわれは期待すべきかという「権利問題」との間の区別である。隠喩を発話するとき、話者も聞き手も、こうした言語的仕組みと隠喩的な効果との間に一定の相関性が存在することに気づいていることは、だれでも認めるであろう。そしてこの意味での隠喩の権利問題は、やはり哲学に残される。犀利なデイヴィッドソンの説は、この事情をあえて無視し

ようとしているようにみえるのである。

2. 相互作用説と、言語行為論による説明

さて話を戻そう。「ライオン」が全体として「H氏」に適合する必要はない、とする立場の方を考えてみたい。つまり、H氏には、「ライオン」の意味全体のうち、〈剽悍〉という意味素性だけが適合するのである。この線の考え方は、隠喩を「意味転移」の一種であるとする伝統的定義を基本的に認めており、隠喩論の主流であるといってよからう。その中にさまざまなタイプがあるが、大きく、言語そのもののレベルでの意味転移を認める意味論的理論と、隠喩文の意味と話者の意図する意味との区別を立てることで、問題を解決しようとする語用論的理論とに分けられるであろう。

1) 相互作用説

意味論的立場の代表は、M. ブラック他の人々が唱えた「相互作用説」⁸⁾ である。ブラックの説によると、それはほぼ以下のように要約できる。「人間は狼である」を例にとると、この文の隠喩的效果は、この文の主題を表示する「人間」と「狼」という二つの語句（ブラックはこの両方を隠喩文の主題とみなしている）の、ふつうは通念にもとづく意味内容（〈凶暴〉〈食欲〉〈闘争的〉など）が、相互に作用しあうことで生じる。この文の副主題の「狼」が《フィルター》として、第一主題である「人間」の、ある特徴を強調しつつ、他を後景へ押しやることで、われわれの人間観は「狼」的に組織される。また、第二主題の「狼」も同様に、「人間」によるその特徴の強調と後景化を通じて、「人間」的に見えてくる。こうして隠喩は、既存の類似性を指摘するのではなく、むしろ言葉の相互作用を通じて、新たな類似性を創造する。——これが、相互作用説の説明による隠喩の効果である。

相互作用説の優れた点は、それが隠喩文そのものから、意味素性の焦点化の仕組みを説明していることと、隠喩による類似性の創造という問題を指摘していることであろう。われわれの見るところでは、その瑕疵は、焦点化されていない意味素性についての考慮が不十分なことにある。なるほど、「人間は狼である」によって、人間観は狼的に変容するかもしれない。しかし、「狼」の焦点化されない素性のうちには、〈毛皮で覆われている〉なども含まれよう。それらを包含した「狼」の全体

が「人間」に妥当すると、この隠喩は語っているのか。それとも、それらは後景に隠れることで、無と化したのだろうか。このような疑問に、相互作用説は必ずしも十分に答えていないように見えるのである。

2) 言語行為論

隠喩の意味は、喩詞の意味全体が文字通りに被喩詞に適合するというのではない、とする立場として、もう一つ、J. サールに代表される言語行為論による説⁹⁾を見ておきたい。この派は、相互作用説とは異なり、隠喩文ないし隠喩表現自体における、意味の変容は認めない。この点では、むしろデイヴィッドソンの説に近い。しかし、この立場によると、隠喩の意味は、隠喩文の文字通りの意味ではなく、話者の意図にかかわるものである。すなわち隠喩とは、主語―述語文を使った場合についていえば、話者が、「SはPである」という文を使って、それとは異なる「SはRである」を意味し（たとえば、「人間は狼である」を使って「人間は凶暴である」を意味し）、聞き手が、「SはPである」の文字通りの意味、つまり《文意味》(sentence meaning)を手がかりとして、話者の意図、すなわち《話者意味》(speaker's meaning)¹⁰⁾を復元するという、言語行為なのである。

この言語行為論による説明は明快であり、隠喩の働くメカニズム（話者はいかにして、隠喩文を使って聞き手に、自らの意図を首尾よく伝えられるか）に関する説明として優れたものだといえよう。この理論に弱点があるとすれば、それは、もし隠喩の意味が「SはRである」であるのなら、なぜ、話者は「SはPである」と言うかわりに、初めから「SはRである」と言わないのか、という疑問に十分答えていないこと、要するに、隠喩の存在理由に関する議論が不十分であるように思われるということである。

たしかにサールは、隠喩において、「SはPである」から「SはRである」の言い換えにできることは、せいぜい隠喩的発話の真理条件を再現することだけだとし¹¹⁾、「SはPである」というとき、人は、「SはRである」以上のことを言っているのだと、認めている。しかしサールはいう。「われわれが隠喩を使う理由が、まさに、われわれの意味することを精確に表現する文字通りの表現が、存在しないことである場合がよくある。さらに隠喩

的発話においては、われわれは、『SはPである』の意味を通過することを介してしか、『SはRである』と言明しないのだ。われわれが、隠喩はどういうわけか本質的に(intrinsically)言い換え不可能だと感じるのは、この意味においてなのである。¹²⁾」

サールは自問しながら、こうしてその問いを放置していないであろうか。

こうして言語行為論は、隠喩文の本義文への完全な言い換えが不可能なことを認めながらも、その不可能な理由は何かという問題の前で立ち止まった。われわれの見るところでは、その原因は、この立場による隠喩の説明が、話者の焦点とする意味素性Rに、隠喩表現の意味を還元してしまったことにある（つまり、隠喩「SはPである」は、本義文「SはRである」の迂曲的な言い方である）。この仕方では、「SはPである」があえて使用される理由は、結局不明に終わらざるを得ないのである。

IV 隠喩におけるイメージの役割

以上、隠喩に関する主要な三つの説を早足で検討してみた。振り返って、これらに共通に言えることは、隠喩「SはPである」の喩詞P全体としての役割がうまく説明できていないのではないかということである。「隠喩の意味」の否定説では、「SはPである」を文字通りに理解することで、P全体の意味は救われたが、隠喩の意味は消滅した。相互作用説と言語行為説は、隠喩に使用される文の文字通りの意味からの移行を認めることで、Pの一部分の意味がクローズアップされ、その他のSに適合しないように見える意味素性を含んだP全体の存在理由は、はっきりしなくなったのである。

われわれが直面している問題は、こう定式化できるであろう。「隠喩文において、喩詞Pの文字通りの意味が否定されることなく、しかも同時に、それとは異なるRが意味されるということは、どうしたら可能だろうか。」上記三説は、暗黙のうちに、「Pの文字通りの意味が否定されない」ということを、「Pの文字通りの意味が肯定される」と同等と見なしていたと考えられる。しかし「否定されない」ということは必ずしも「肯定される」とことと同じではない。われわれはこのように発想を改めてみたい。隠喩「SはPである」の言明において、Pは直接Sについて

述定されるのではなく、むしろ、Pの表示対象のイメージを聞き手の心に喚起する働きをする。そしてこのイメージがSに関係づけられるのだと。こう考えるなら、SとPとの関係は、Pの表示対象を中間にはさんだ間接的な関係となり、したがって、Pは、Sについて直接肯定も否定もされないことになる。

これを直喩の場合と比べてみれば、状況はいっそうはっきりする。直喩「SはPのようである」では、Pの発話において重要なのは、Pの記述内容である。しかし隠喩「SはPである」では、Pの発話の働きの大切な部分は、聞き手に対して、Pの表示する事物のイメージを指し示すことにあるのである。

少し議論が先走りすぎたが、このような見取り図にもとづいて、隠喩の成功する過程を分析するとすれば、以下になるだろう。P自体とその話者による焦点化された意味素性Rとの区別に対応する形で、聞き手による隠喩の理解について、二つの層を区別することができると思う。

a) 話者の意図に即して隠喩を理解する層

話者が「SはPである」を隠喩のつもりで発話するとする。聞き手は、SとPの間に緊張を感じるが、この緊張に促されて、この発話を文字通りにではなく、隠喩として理解しようと努める。その際、聞き手は、話者がP(喩詞)のうちの一部の意味素性Rを焦点化していると考え、話の文脈からそれを推測することによって、この理解に到達しようとする(この層にだけ注目すれば、ひとまずこの隠喩の意味を「SはRである」と述べることも可能である)。

b) 喩詞の表示対象のイメージに即して隠喩を理解する層

聞き手は、話者によるPの使用を通じて、Pに対応するイメージへと指示される。その場合、聞き手はまずは、イメージを話者による焦点化に即して思い浮かべるのが普通であろう。しかしその後、聞き手は話者の意図にこだわることなく、そのイメージを眺め、話者の焦点化とは一致しない特徴に、自由に焦点を当てることもできる。こうして話者の隠喩に、聞き手が、話者の意図しなかった、彼自身の見方による新たな意味づけを与えることが原理的には可能となる。

このうち、a)の層は直喩と同様の機能である。しかもこの層を無視すれば、隠喩は、話者の意図からまったく独立なものとなるが、これは明らかに不合

理である。しかしそれでも、隠喩を直喩から分かつのは、b)の層であるというべきである。この層において、隠喩は話者の一方的な主導権からはなれて、聞き手による自由な解釈の可能性を用意するものとなるからである。

以上の二つの層の関係を、「ヨハネは、燃えて輝くともしびであった」(ヨハネ5-35)の例によって確かめてみたい。話者であるイエスの焦点化したい素性が、〈闇夜を照らす〉であったとしよう。聞き手(読み手)はこの隠喩を聞いて(読んで)、まず、イエスの話者意味である「ヨハネは、燃えて輝くともしびであった」を理解しなければならないだろう。けれども聞き手は、同時に、燃えて輝くともしびの姿を想像し、さらにそれによって喚起された、松明のイメージなどから、新たな含意(たとえば人の心を暖める)を引き出すこともできる。こうした含意が公共化することがあれば、新たな意味が一つの隠喩に付け加えられることになるであろう。

このような言葉(喩詞)の使用における対象指示の機能は、よく知られたK.ドネランの、「確定記述の指示的使用」の特徴に、ある程度まで一致するものである¹³⁾。ある程度まで、というのは、隠喩の喩詞の指示対象は、まずはイメージであって、実在までしている必要は必ずしもないということ。また、イメージであるために、聞き手の想像力の作用がその内容を左右するということである。要するに隠喩の喩詞によるイメージの指示は、確定記述の指示的使用と異なり、聞き手の能動性の発揮される余地を残しているわけである。

最後にもう一度、予想される疑問に備えて、直喩と隠喩との関係について次のような注釈を加えるべきであろう。

以上のような考え方は、隠喩と直喩の機能を全く対立させることが目的ではない。このことはいくつかの意味で言うことができる。

まず、隠喩は上述a)の層において、直喩と同様のはたらきを含んでいる。説明はくりかえすまい。この面だけをみれば、隠喩とは縮約された直喩だという古来の見方も、まんざら誤りとはいえないだろう。

次に、現実の隠喩と直喩の使用の実態を見比べると、両者のどちらを選択するかが、主に文体的な理由からきていることが少なくない。直喩の連続を避けるために隠喩を用いたり、逆に調子をそろえるため直喩ないし隠喩を連続させるということもあろう。

そのいずれを用いても、効果の上で大差がないように見える文脈も珍しくない。隠喩と直喩を、現実の効果の上から決定的に差別づけることは、おそらく困難である。しかしこの点については、先述のように、隠喩の事実問題と権利問題の区別に注意を促すしかない。われわれの議論は、隠喩の権利問題を扱ってきたのであり、その限りで、隠喩と直喩との間にある程度明確な区別を立てることができたわけである。

第三に、以上の議論は、直喩に、喩詞に対応するイメージを喚起する機能を否定しているわけではない。われわれは、直喩によっても、人はイメージへといざなわれる。しかしこのイメージと、話者による焦点との位置関係が隠喩とはちがう。直喩ではこのイメージが、話者による焦点化の作用に終始束縛されている。話者の焦点をはなれた理解は、たしかに可能であるが、その場合はすでに話者の意図した直喩の理解とはいえないであろう。これに対して、隠喩は、喩詞のイメージの話者の意図に沿った解釈をその理解の必要条件としながらも、それに反しない限りで、同時にさまざまな仕方で同じイメージが眺められることを、暗に認めているように思われるのである。

おわりに

言葉は、さまざまな意味素性の統合体であり、その間には、本質的要素から周辺的要素にいたる一定の秩序関係が、(むろん一定の不確定さを残しながら) 成り立っていると考えられる。しかしそれらの言葉が、具体的な文脈において使用されるときには、事情は異なる。われわれは、それらの言葉の意味素性の間の秩序関係を、自らの関心にもとづいて自由に編成しなおす。

隠喩において、人間の関心に基づく言葉の意味の再編成は、もっとも顕著になされる。すなわち隠喩の使用は、話者に、新奇で印象的な語り方を許すだけではない。それは、聞き手を隠喩表現に対応するイメージへと、自由に向かわせることを通じて、聞き手に、話者自身が意図していなかった新たな意味合いまでも、その表現に結びつけることを可能にする。

心理学者 R.D. ラマニシャインは、「見る人と見えるものは分かちがたいシステムを、一つのゲシュタルトを形成し、そのため見えるものは常に、いかに

見るかということ、つまり知覚者の具体的な人間学的条件と、解きほぐしがたい密接な関係にある。¹⁴⁾」と適切にも述べている。隠喩は、世界を映す鏡であるだけでなく、映る世界を覗きこむわれわれ自身の姿をも映し出す鏡なのである。

註

- 1) 「意味素性」(semantic feature) という用語は、ここでは、術語としての定義にかかわりなく、本文に説明したほどの直観の意味で理解する。つまり、われわれが、ある表現の意味を構成する諸々の要素として、その表現の通念的理解にもとづいて挙げることのできるような特徴を、この名で総称することにする。
- 2) 「焦点」(focus) とは、「文を話者が前提(presupposition)としている情報と、そうではなく伝達したい中心となっている情報に分けた時の後者」と説明され(田中晴美他編『現代言語学辞典』(成美堂、1988年)、通常は、焦点化は文の諸要素について言われる。しかし本稿では、話者が、具体的な文脈において、ある表現を使用するに当たって、それに属する特定の意味素性に注目していること、また、その素性が話者の伝達したい中心であることを表すために、この言葉を使うことにする。
- 3) もちろん焦点化は、社会の中で比較的に固定している意味素性に対してだけ起こるのではない。一定の文脈でしか成り立たない臨時的な連想が焦点化されることもあろう。ここでは表現の「意味」ということを、こうした場合も含めたきわめて広い範囲で、理解することにしたい。
- 4) 「被喩詞」と「喩詞」という用語は、ふつう隠喩について使われる言葉であるが、ここでは、本文に説明したような意味で、直喩の場合についても使うことにする。なお tenor, vehicle には、別の訳語もある。芳賀純・子安増生編『メタファーの心理学』(誠信書房・1990)、5-6 頁を参照。
- 5) D.Davidson, "What Metaphors Mean" (1978), in: D.Davidson, *Inquiries into Truth and Interpretation*, Oxford, 1984, p.245.
- 6) Davidson (1978), p.262.
- 7) Davidson (1978), p.247.
- 8) M.Black, "Metaphor" (1962) (邦訳・マックス・ブラック「隠喩」(尾ヶ崎彬訳)『創造のレトリック』(佐々木健一編, 勁草書房, 1986年), 2-29 頁) 以下の引用は邦訳によった。
- 9) J.Searle, "Metaphor", in: J.Searle, *Meaning and Expression* (Cambridge, 1979).
- 10) 詳しくは、「話者の発話意味」(speaker's utterance meaning) と呼ばれている。
- 11) Searle (1979), p.114.
- 12) Searle (1979), p.114.
- 13) K.Donnellan, "Reference and Definite Descriptions", in: *The Philosophy of Language* (ed. by A.P. Martinich, Cambridge, 1985).
- 14) R.D. ラマニシャイン (田中一彦訳)「経験のメタファーとメタフォリカルなものとしての経験」『メタファーの心理 (現代のエスプリ・286)』至文堂, 1991年所収, 18-19 頁。

参考文献

1. G.Lakoff and M. Johnson, *Metaphors We Live By* (Chicago and London, 1980).
2. D.Davidson, "What Metaphors Mean" (1978), in: D.Davidson, *Inquiries into Truth and Interpretation*, Oxford, 1984, p.245.
3. J.Searle, "Metaphor", in: J.Searle, *Meaning and Expression* (Cambridge, 1979).
4. K.Donnellan, "Reference and Definite Descriptions", in: *The Philosophy of Language* (ed. by A.P.Martinich, Cambridge, 1985).
5. W.Alston, *Philosophy of Language* (Eaglewood Cliffs, N.J., 1964), ch.5.
6. M.C.Beardsley, "Metaphor", in: *Encyclopedia of Philosophy* (ed.by P.Edwards et al., New York and London, 1967), vol.5.
7. M.Bergmann, "Metaphorical Assertions" (1982), in: *Pragmatics — A Reader* (ed.by Steven Davis, Oxford, 1991).
8. P.Lamarque, "Metaphor", in: *The Concise Encyclopedia of Western Philosophy and Philosophers* (ed.by J.O.Urmson & J.Ree, London, 1989).
9. ラマニシャイン (田中一彦訳)『科学からメタファーへ』(誠信書房, 1984 年)
10. 芳賀純・子安増生編『メタファーの心理学』(誠信書房, 1990 年)
11. マックス・ブラック「隠喩」(尼ヶ崎彬訳) (『創造のレトリック』(佐々木健一編, 勁草書房, 1986 年) 2-29 頁)
12. M.C. ビアズリー (相澤照明訳)「隠喩のひねり」(『創造のレトリック』, 30-53 頁)
13. ハラルド・ヴァインリッヒ (川上明孝訳)「隠喩の意味論」(『創造のレトリック』, 59-79 頁)
14. S.R. レヴィン (青木孝夫訳)「隠喩の標準的な読解法と文学的隠喩」(『創造のレトリック』, 141-160 頁)
15. バーバラ・レオンダー (長野順子訳)「隠喩と幼児の認識」(『創造のレトリック』, 234-258 頁)
16. 佐藤信夫『レトリック感覚』(講談社, 1978 年)
17. 佐藤信夫『レトリック認識』(講談社, 1981 年)
18. グループ μ (佐々木健一・樋口桂子訳)『一般修辞学』(大修館書店, 1981 年)